

「美味しんぼ」と農業問題

札幌大学教授 岩崎 徹

一.

みなさんは「美味しんぼ」(作・雁屋 哲・画・花咲アキラ)をご存じでしょうか。本誌読者に「マンガ世代」は少ないと推察されるので、あるいはご存じないかもしれませんが。そこで今回は読者に「美味しんぼ」をご紹介します。美は私も「美味しんぼ」の存在は学生に教えてもらったのです。ゼミコンパなどで農業問題や食糧問題を議論していると、そのことは「美味しんぼ」に描いてあるという学生が多いのです。それならと私も読み、授業にも取り入れる

ようになったというわけです。

「美味しんぼ」はビックコミックス『スピリッツ』に連載中であり、単行本としても「小学館」から三三巻まで出版されています。また、今年三月までSTVテレビで毎週火曜日アニメで放映されています。三月で終わりましたが続映を求める声が多いと聞いています。

二.

主人公山岡士郎は新聞記者ですが、普段は遅効常習犯で吞兵衛勤務中には競馬新聞を編み、居眠りばかりのグータラ人間です。士

郎の同僚に栗田ゆう子があります。

彼女は知性があつてしっかり者、そしてちょびりおちゃめな女性で、士郎を支え励まし、時には彼をけしかけいたずらをする素敵なパートナーであります。「美味しんぼ」は海原雄山の「至高のメニュー」対山岡士郎の「究極のメニュー」の対決を軸に話は展開しますが、故あって「料理対決」で骨肉の争いを演じます。また士郎やゆう子の幅広い人間関係が織り成すドラマの中で、士郎は「料理」を通じてさまざまな問題を解決します。グータラな士郎ですが、いざとなると相手が上司であれ、政

界・財界のトップであれ、「有名人」であれ、虚栄や権威主義、偽物を見抜きズバツと本当のことを言います。それがトラブルのもとになるのですが、これが「美味しんぼ」の魅力でもあります。

ところで士郎の料理はハンパではありません。本物の材料、本物の調理の仕方、調理への心構え：「グルメマンガ」の限界はありますが伝統的な食文化を大事にする思想と、それを育てた多くの人びとへの愛情がみちみちているように思われます。そんな士郎ですから、今日の日本の食生活や農業のあり方、日本人のニセモノの生き方と対決するようになります。

三.

そこで、山岡士郎に日本の食生活やその背後にある農業問題を語ってもらいましょう。

☆農薬、化学調味料、抗生物質づけの食料

「日本では加工食品や外食産業で化学調味料が大量に使われている。その結果今の日本人、とくに若い人たちは舌が化学調味料に慣れてしまって、自然の物の味では物足りなく感じるようになってしまっている」(第九巻第五話「五年目のパスタ」)。そして「舌のしびれる化学調味料づけの辛し明太子」「人工着色料と化学調味料たっぷり」の玉露茶」「せまいケージの中で、抗生物質が入った配合飼料を食べさせられた鶏」などの話になります。こんなものに栄養価があるわけありません。第二巻第一話「食品成分表の怪」では一九五〇年と一九八二年の栄養価を比較し「ホウレンソウの鉄分は三分の一以下、キャベツのビタミンAは五分の一」になったとし、士郎は

「こうなった理由は農薬、除草剤の多用だ」と批判します。

☆輸入食品の安全性

さらにひどいのは輸入食品です。「アメリカから輸入したレモンは、船で運んで来る間にカビが生えるのを防ぐために、すべてにOPPという防カビ剤が塗ってある」。「OPPは発ガン力が強いいため、国内では使用を禁止されていたのを、アメリカの圧力に負けて、昭和五十二年に許可したんだ。」(第一四巻第七話「秋刀魚の味」)ところで士郎はアメリカに対して痛烈な批判をしますが、アジアの人びとにたいしてはひとつの思いがあります。「アジア各国からやって来る人が増えたけれど、日本人のアジアに対する態度はひど過ぎるよな……昔、日本は軍隊でアジアを侵略したけれど、今は経済力で侵略しているんだ。」(第二巻第三話「韓国食試合」)

☆米自由化問題

民族的な食文化にうるさい士郎は、当然米自由化問題に言及します。「日本の歴史は稲作の歴史でもあります。」「経済の風向きは□□

□□変わります。それなのに国際分業などとかっこいいこと言っていて、米作をやめてしまつて米作の伝統技術を失つたら、日本はどうなるんです」(第一六巻第六話「飯の友」と怒りをかつけます。

☆リゾート・ブームにたいして

さらに士郎は「むらおこし」にも一役買います。地域振興は、地域の自然と人とを大事にすべきと説きます。現在では、バブル経済の崩壊、そして共和産業事件などで全国一律のリゾート施設には反省の声が湧きおこっていますが、ブームの最中、たとえば石垣島空港問題にたいしても「ホテル、ゴルフ場、マリンプレイパーク、カラオケ：そんなものは日本中どこにだってある」「そんなものと引き替に島にしかないものを失つてしまふ」「コンクリ造りのレジャー施設だけの島に誰が来ると言うのですか」(第二八巻「長寿料理対決」)と痛烈です。

四.

士郎の一貫した主張は「本物志

向」であり、「本ものの料理」を主張することによって実は「本物の生き方」を説いていると思われまふ。「自分たちの食文化の基盤をしっかりと踏まえないと……自分の文化も見失い、他国の文化も真底理解できない」(第二六巻第三話「グルメ志向」)のです。

食生活は民族的、地域的なものであり、食糧と農業とは一体のもの(食農同根)でした。ところが今日の日本、そして世界の食糧と農業は完全に分離しています。戦後世界経済がこのような極度の分離をもたらした。「飢餓と飽食」「農業摩擦」「環境破壊」などをもたらした。これが今日の農業問題の本質——と私は思います。

どうです読者諸兄！たかがマンガなどと言わないで、肩の力を抜いてたまにはマンガを通して若者と農業問題を議論してみませんか。